編集後記

漸く初夏を迎えるころになってから、「社会教育研究」第十二集を皆様へ送り届けることができるようになった。いろんな手違いのため発行予定日が意外におくれてしまったことを、まず編集者として深くおわびしなければならない。

本第十二集は、従来の研究年報と趣きを異にし、特集という型態で発行することにした。こんにちほど公害問題が深刻をきわめているときはない。このようなとき金沢大学社会教育研究室としても、研究員各自専門の角度から、ぜひこのぬきさしならぬ日本いな世界共通の根本課題にたいし、歯に衣をきせないで問題点の所在をえぐりだそう、というのが本特集号発行の意図である。編集を終わってみると、公害問題と教育問題とのタッチ・ポイントの堀り下げにはふじゅうぶんのきらいはあるが、資料の提供や論説の展開においてきわめて充実した側面もあるので、その欠点は補い得るものと信じている。どうか本年報を読者はあらゆる状況に対応し活用していただきたい。

公害に関する日々のマスコミの報道をふくめ、最近、官公私の公害に関する資料、論説の数はむしろ過剰の観を呈しているのに、公害除去の対策のほうはいっこうに進まない。実践が理論より偉大なとき、その理論は有益となろう。しかし理論が実践の貧困にたいし、いたずらに過剰なとき、その理論はしばしば無益となる。ただ公害の論のみ多くしてかんじんの公害除去の実があがらぬとき、その禍根はいったいどこにあるのか、本年報を虚心に読んでくだされば よくわかるはずである。とにかくこういう型態での公害問題との取り組みを示した社会教育関係書はあまり他に類例をみない、といったら編集者の自画自讃になるだろうか。

さいごに公私繁忙のなかを本年報のために貴重な時間を割愛されて、執筆ご快諾くださった諸先生には、誌上から厚くお礼申し上げるとともに、今後とも変わらざるご協力をお願いしてやまない。

（戸頃重基）